2006年から始まったマーラー・ツィクルスも終盤にさしかかっているデイヴィッド・ジンマン指揮チューリヒ・トーンハレ管弦楽団だが、2月26日は第8番《千人の交響曲》のため、ルツェルンのルツェルンカルチャーコングレスセンター（KKL）でのコンサートとなり、今までと違った響きが楽しめた。

スイス室内合唱団、チューリヒ少年合唱団に加え、WDRケルンラジオ放送合唱団の大合唱に、ソリスト達は、冒頭押され気味であった。しかし、ジンマンの音楽が緻密になっていくに従って、熟練した表現力で聴かせたアンソニー・ディーン・グリフィ（T）、大合唱にも負けない芯の強い声を誇るイヴォンヌ・ネフ（A）、リリックな音楽性が心地よかったスティーヴン・パウエル（Br）、細い体からは想像できない豊かな響きのユリアーネ・バンセ（S）などが満足度を高めてくれた。メラニー・ディーナー（S）は高音が金切り声のようになるのが気にかかり、ビルギット・レンメルト（A）とアスカル・アブドラザコフ（Bs）は少々退屈な歌い回しに思えたが、2日間のコンサートの後すぐに開始されるレコーディングでの健闘を祈りたい。オーケストラも、トーンハレの柔らかな音響の中では多少暴力的に聴こえなくもないフォルテがKKLの中では効果的に反響していた。それにも増して、ピアノの叙情的な表現が円熟してきているのには驚かされた。

リサ・ラーソン（S）はMater Gloriosaをホールの最上階から歌ったが、清らかな声が容姿と相まって、好評を博していた。スタンディングオベーションとなった会場から、マエストロに対する敬意と好意がひしひしと伝わってきて、好感の持てるコンサートであった。（中 東生）

Concert ジンマン指揮チューリヒ・トーンハレ管の《千人の交響曲》